

経営者への活きた言葉

報いを求めず積み上げていく 伊與田 覺(論語普及会学監)

1. 会社など、組織では「人材」「人財」という言葉が用いられ、才能があり、大いなる働きをする人のことを意味します。これに対して「人物」という言葉もあります。「あの人は人物だ」という時、これは単に才能のある人をいうのではありません。才能と徳を併せ持った人、才能もあるけれども徳のほうが勝っている人を指します。
2. 中国古典の「大学」に「徳は本^{モト}なり、財は末^{スエ}なり」という言葉があります。道はもともと天地宇宙のルールを表します。そのルールを人が素直に受け入れ、実行した時に、その道は徳になるのです。財という字の「貝」はもともと貨幣の代わりに使われていました。これに「才」がついて財となりますが、「才」には働きという意味とともに「わずか」という意味もあります、つまり財というものは全体からするとわずかな存在であり、本来でいえばあくまでも徳が本なのです。
3. 腹に一物あっては、いくら善を積んでも本当の徳は備わりません。徳がなくなればせっかくつくったものも失われてしまいます。報いを求めずに積み上げていくものこそが、本当の徳につながることを心しなければならぬと思います。

(参考:「致知」2011年11月号)

経営者のための理念・哲学

渋沢栄一と新渡戸稲造の言葉 松沢 幸一(キンビール社長)

1. 明治22年、キンビールの前身であるジャパン・ブルワリーの日本人重役として渋沢栄一が4年間ほど務めている。渋沢は名著「論語と算盤」で、「大きな自然的逆境におかれることは天命であり自分の本分であると覚悟し、弛ませ屈せず勉強するのが良い」と教えている。さらに「社会というものがなければ、一人で富むわけには行かない。恩恵を受けた社会を放っておいて、われ一人富んでよろしいという理屈は、ちと勝手な申し分だと思う」、と語る。
2. まさに、今日のCSR(企業の社会的責任)に通ずる、経営者やリーダーが心すべき言葉である。また「武士道」を著した新渡戸稲造は、「自分の良心と信念に従い、誠をもって自然の理にかなったように実践することの大切さ」を説いている。

(参考:「文藝春秋」:2011年11月特別号)